

滄水会ニュース

第7号

平成5年6月30日

滄水会
職業能力開発大学校

〒229 神奈川県相模原市橋本台4-1-1

能開大よ、訓大の栄光を嗣げ。

職業能力開発大学校 校長 早川 宗八郎

本年4月からいよいよ校名が職業訓練大学校から職業能力開発大学校に改称されました。30年の輝かしい栄光を想い、深い愛着を残しながら、新しい展開への強い決意をもって校名改正を行いました。その経過については本校広報紙IVTジャーナルVOL. 5, No.5 (1992) に少し詳しく書かせて貰いました。文部省学位授与機構から学士・修士の学位が与えられる認定を受け、また長期課程に国費留学生を受け入れるに際して、英語校名も“The Polytechnic University”と変えることとし、IVTジャーナルはPTUジャーナルと改名します。ただ国際協力関係では評価を受けてきたIVTは海外指導員研修コースなどに今後も使用して行きたいと思っています。

「中訓(中央職業訓練所)」から「訓大」へ、そしてこの度「能開大」へと三段跳びで言えば最終飛跳になります。今年の2月にも、卒業生の皆さんには懐かしい「校名改正記念駅伝大会」が行われました。私も激励のため出席し、開会の挨拶で今度の校名改正に触れ、その記念の意味も新しく問い直してくれることを望みました。学祭の呼称「訓大祭」についても、学生諸君

の選択に任せました。

上に述べた三段跳びのホップ・ステップ・ジャンプの各飛跳には、前の飛跳を引継ぎながらもそれぞれ別の飛び方をしなければなりません。能開大の目的は訓大と変わるはずはありませんが、職業能力開発の内容の変化に対応あるいは先取りしていかねばなりません。滄水会の先輩の方々からよく、「開設当時はこうであったが…」と言うお話を聞きます。開設以来の精神を尊敬し大切にしていきたいです。しかし旧体制(アンシャンレジーム)を懐かしんでいるわけにはいきません。それは現在職業訓練の場で日夜努力しておられる先輩方がもっとも正しく認識されていることと存じます。それに答える姿勢を示す契機が校名改正であると思っています。なお将来を考えれば、三段の飛躍で終わりになるわけのものでもないでしょう。義経の「八船艘跳び」位までは覚悟せねばならぬかもしれません。同窓生の皆さんのご理解とご支援をお願いします。

「歴史は古しいえども常に新たである。」(ハイネ)

校名改正にあたって

昭和36年中央職業訓練所が創設され、昭和40年に職業訓練大学校と改名され、この年に第1期生が卒業した。今春より職業能力開発大学校(当大学校)と再改名される。能力開発とは教育のことであるから極めて一般的な名称で、大学を別の言葉で総称したものといえる。つまり職業訓練の大学レベルの総称から教育の大学レベルを総称した名称になったといえる。これは機能等の名称であり、極く一般的な大学名に変わる時が技能教育大系が自然に確立する時であろう。しかし労働省が他省に越して名実ともに新しい教育大系を創造していることは間違いない。当大学校に博士課程ができて、科学・技術・技能の一体化を目指した理念を具現化した博士を世に送り出すことも我々一期生以来の念願であった。「実践」、「施工」の第一人者としての博士の到来が待たれる。この段階で4年制の職業能力開発大学校が主要地域に設置され、フェーズⅢを迎えることになる。現在発展顕著な開発途上国、中進国への国際協力の観点からもフェーズⅢの実現は急がれるであろう。現在職業訓練短期大学校、技能開発センターの職位制についても、社会的認知を得るには、当大学校の認める博士、修士、学士が他大学のそれらと混然一体となって支えていることが必要であろう。むしろ当大

雇用促進事業団 職業能力開発指導部

花田 登

学校の学位の位置付けは当初の理念に沿ったものであり、この分野においては主体的にリーダーシップを発揮するものであり、高い社会的評価を得るものでなければならぬ。かつて初代校長成瀬博士は、博士御自身に関係する東北大学の博士認定は歯車の理論的研究論文だけでは与えない。実験研究と共に実際に歯車を加工製作できる力を求めたとよく話されていた。

このことから考えれば職業能力開発大学校博士を取得したものが当大学校、短大、センターの目標スタッフ像ということになる。このようにしてはじめて、それら施設間の人事交流も自然とうまくいく。例えば、現職業能力開発促進センターは職業能力開発の一翼を担うのは当然として、応用研究を主体として地域の中核に参画できる存在として位置し、学位にも挑戦し得る環境が生まれ、そこで初めて一生を賭けるやりがいのある職場になる。技能・技術というのは種類の問題ではなく、その質の問題である。手仕上げが下で、FMSが上ということにはならない。今日の飛躍的發展を直接当大学校で支えて来られた関係スタッフの皆様に限らない愛と感謝と敬意を表しつつ筆を置く。

改名によせて

中央職業訓練所の名称をマジックで消し、職業訓練大学校のゴム印が押された茶封筒が自宅へ届いたのは昭和40年3月末のことであった。小平市に位置した職業訓練大学校は、当時の高校生にとってほとんど聞き覚えのない校名であった。名称の通り大学レベルであることは名称変更により中央職業訓練所からすると一段とはっきりしたようだ。

校名変更については当時の学生の夢でもあり、当局を動かした努力を評価するのは私一人ではないはずだ。愛称は訓大、英語名はIVT(The Institute of Vocational Training)。海外協力の仕事に従事していた頃、よく聞いた話では東南アジアの技術者や指導員は東大や有名私立大学名を知らない者もIVTはほとんどが知っているとのことであった。

海外に響いた訓大の名も4月から職業能力開発大学校に変わる。新しい名称は始めはどうしてもなじみにくい。昭和から平

岩手雇用促進センター 調査役

水谷 宏

成に年号が変わったときも、中訓から訓大へ変わったときもそうであった。

訓練や職業訓練という単語のもつイメージは堅いとか苦しいとかの暗いイメージがあるようだが今回の職業能力開発は自分の潜在能力を引き出すような可能性をイメージできる。ともかく、早く世の中になじんで欲しいものである。

名称変更は会社名が時代とともに変わるように未来への期待が込められている。NTT、JA、JR等もう違和感のかけらも感じない。訓大から能開大となるのか職能開大となるのか定かではないが指導員養成という目的大学であり、労働省所管大学であることには変わりがない。名称変更後、すぐには変化を把握できないが世間はえてして厳しい目を向ける。

存在意義を強くアピールすることも重要であろう。我々卒業生を含め、今後の展開を暖かく見守っていききたい。

職業能力開発大学校改名によせて

春四月の入学シーズンになれば、私が訓大(小川学舎)に入学するために上京した当時のことを思い出す。西武国分寺線の小川駅へ向かう車窓から武蔵野の木立を眺め、これが武蔵野か

滋賀雇用促進センター 雇用援助部門

高山 純次

と感慨もひとしおであった。小川駅に降り立ち、方向が解らなくなってしまう、大きな建物が立ち並ぶ方向へ一目散に目指した。数分も歩くと守衛所があり、訓大ですかと尋ねると、そこ

は訓大ではなくブリジストン(株)であるという。では、訓大は何処ですかと再度尋ねると「知らない。駅の向こうに訓練所があると聞いているが。」が答である。地元の人に知られていない。ようやく訓大に着くや住宅街の一區画にあり、あまりにもこじんまりとしていて、広大なキャンパスを夢見ていた私にとって、またがっくりとした思いを今になっても思い出す。卒業後20年が経ち、転勤、転職を繰り返して現在に至っている。

最近、訓大が遅ればせながら改革に着手されたことを知り訓大時代の授業を思い出した。「職業技術教育(技術・技能者養成)の為に設置された学校は時代・産業界の要請に応えられなくなり、目的を達成すれば消滅する。」と教わった。訓大についても同様の運命にあると認識したものだ。訓大卒の学生が当事業団を始めとした能力開発施設に採用される機会が少ないように感じている。かつて、訓大新卒者が着任されたその日に職種転換対象者であることを告げたことがある。現場の私達には日

常的なことであったが、当人にとっては残酷な言葉として伝わったに違いない。訓大のミスマッチにより多くの人が辛い思いを経験したに違いない。

今回の能開法一部改正にて、校名を改名し実質的な改革を進めてもらいたいと考える。若者が夢をもてるような大学を文部系とは一味も二味も違った大学造りに努めて戴けるものと期待する。卒業生を始めとし、能力開発に関っている者が、能開大へ行けば「何か手がかりが、そこにあるような」存在感が欲しい。能開大の先生方も、何十年も同一施設に居ることなく、地方の団施設へ飛び込んでもらいたい思いがする。

今回、原稿依頼され訓大の楽しかった思いをと考えたが、敢えて日頃感じ、考えていることを記した。能開大の発展とご健闘をお祈り申し上げる。

さようなら「訓大」

フレーフレー「能開大」

職業能力開発大学校改名に寄せて

私が職業訓練大学校を卒業してから早2年。「訓大」の名で馴れ親しんで来た私にとって、このたびの改名は喜ばしいことではありますが、同時に寂しいことでもあります。

在学中は、ちょうど「法改正に向けて訓大の名称を変えよう」と話が持ち上がりだしたときでもありましたし、私自身も「訓大なんて有名じゃないし、なんとなくダサイ名前だし…なんとか名前変わらないかな」と思っていたのですが、いざ名称変更が決まり、もう日もないうちに改名するとなると、なんともいえない寂しさに見舞われます。

今から考えてみると、「訓大なんて…」と言いながらも、私の心の中には、「かけがいのない母校の名前」として深く息づいていたような気がします。

30数年前、訓大は武蔵野の大地に中央職業訓練所として発足してから、職業訓練大学校と名前を変え、新たな出発をしました。そのとき在学していた先輩方は何を思い、何を感じたのでしょうか。改名したとはいえ、授業の中身はそれ以前と何ら変わることなく行われたでしょうし、先生方とて変わることなくそれまでどうりに教授なさったことだろうと思います。残念ながら、私は中央職業訓練所時代の訓大を知りませんので確かなこ

神奈川技能開発センター 講師

中野 亜求了 (電子科 第27期)

とは申し上げられませんが、きっと先輩方は、いま私が感じている気持ちと同じようにどことなく淋しく思われたのではないのでしょうか。

ほとんどの女性は、結婚すると姓が変わります。旧姓を捨てるのは、それまでの自分を捨てるのと同じような気がするものだ、と以前誰かから聞いたことがあります。実際にその様なことはあり得ないとしてもそう感じてしまい、淋しく思うことがよくあるそうです。たぶんそれと似たような気持ちなのでしょう。

新しい校名になっても、私が職業訓練大学校で学び卒業したという事実は、決して変わることはありませんし、私はそれを誇りに思っています。現在在学中の学生さんは職業訓練大学校に入学し、職業能力開発大学校を卒業していくこととなります。けれど、おなじ学校で学び、卒業したことをずっと誇りに思っていて欲しいと思います。

かつて中央職業訓練所から職業訓練大学校と名前を変えたように、いままた職業能力開発大学校と名前を変えて、新たな出発をする我が母校に心からの祝福とエールを贈りたいと思います。

職業能力開発大学校改名に寄せて

職業訓練大学校が職業能力開発促進法の一部改正にともない平成5年4月1日より職業能力開発大学校に改名することになった。改名と聞いて思い出すのは、中央職業訓練所から職業訓練大学校に名称変更するときのことです。我々4期生は、中央職業訓練所で入所し、数ヶ月もたたない内に改名し大学校になるといわれとまどいながらも、喜びも大きかったように記憶している。また名称をどうするかについては学生自治会の集会等

福島技能開発センター

(福島職業能力開発促進センター) 開発援助課

阿部 豊

で何度も討論し、職業訓練大学校という名称に賛成することを決定したように記憶している。

昭和40年1月の改名記念式典は機械科の実習場で行われ、労働大臣の挨拶がありその他数名の祝辞があり、乾杯をしたがそのときのビールが非常に冷たかったことと、1月の寒い時期だったので震えながら式典に参加した思い出がある。2月には改名記念駅伝大会が行われ夜半に降った雪の中、多摩湖湖畔を駆

けたのがつい最近のように思われます。

昭和43年4月に雇用促進事業団の訓練施設に勤務してから現在に至るまで、施設の名称が何度か変わった。始めは総合職業訓練所次に総合高等職業訓練校その次に技能開発センター、平成5年4月より職業能力開発促進センターになる。施設の名称が変わることで訓練の対象、訓練内容、訓練期間等が変わってきているが、職業訓練（職業技術教育）が飛躍的にとまではいかないまでも着実に発展してきたと思われる。しかし視点を変えてみた場合本当に職業技術教育が発展し、訓練の体系が出来ているだろうか、もう一度原点に戻って考えてみる必要はないだろうか。雇用促進事業団の訓練施設は在職者訓練、離転職者

訓練、企業の教育訓練の援助等と能力開発短期大学校、能力開発大学校での訓練になり、都道府県の訓練施設も高卒対象に変わりつつあり、訓練施設の数も決して増えてはいない。民間企業の訓練施設も大きな変化はないのではないだろうか。工業立国、技術立国を担うこれからの若い技能者、技術者の養成に不安はないだろうか、職業訓練の制度、内容、今後の展開等も含め職業訓練大学校や訓練施設の名称変更を機会に再度考え行動していく必要があると思うが、これは私だけの紀憂だろうか。

私も職業訓練大学校の卒業生として、今後益々職業技術教育が発展していくよう微力ながら頑張りたいと思っています。

*記憶間違いがあった場合はお許し下さい。

職業能力開発大学校改名に寄せて

今回、我が母校「職業訓練大学校」が「職業能力開発大学校」と改名されることになり、訓大内部ではいろいろな議論があったと聞いておりますが、卒業生の一人として複雑な心境です。

私事になりますが、「中央職業訓練所」（通称中訓）が開所されたのは、昭和36年4月20日でした。小生が長野の山の中で中訓を知ったのは、職業安定所勤務の叔父から「労働省が技術関係を教える先生を養成する学校を設置した。」との情報でした。翌年へてこな名前でしたが高卒4年間の学校とのことで、一般の大学と同じというイメージをもち受験しました。その時の入学試験会場は「長野総合訓練所」（同一市内にあり名前だけは知っていた）でした。その後、桜咲く4月に東京都下北多摩郡小平町の中訓に入所しました。

当中訓は、教科内容が工科大と同じなのに大学扱いがされていませんでした。入所早々に1期生が中心となって、人事院の上級採用資格を始めとした資格獲得運動とともに、校名

東京職業訓練短期大学校 電子技術科

宮 沢 昊 一

改正にむけて活動をしていることを知りました。その後「改名実行委員会」を中心に全学生が団結し、事業団・労働省に働きかけ、ともかく「中央職業訓練所」から「職業訓練大学校」に改名がなされ、昭和40年2月1日開講式が行われ、翌3月に1期生が「職業訓練大学校」の初の卒業生として卒業されました。また、昭和49年に開校した「東京職業訓練短期大学校」の第1期生の初めての就職活動の時も、「訓大の付属短大」としてPRしてあるきました。従って、「職業訓練大学校」という校名には、小生として非常に愛着があります。

今回の「能力開発」は、従来の「職業訓練」の持つなんとなく暗いイメージに比べ、積極的なイメージが感じられ、(学校名として適切かどうかは別にして)また企業内でも「能力開発」が重視され、新しく構築化されつつあります。このような時代の流れの中で、「職業能力開発大学校」が雇用促進事業を推進していく先導として、ますます発展されることを祈ります。

職業能力開発大学校改名に寄せて

この度の職業能力開発促進法の改正により、職業訓練大学校から職業能力開発大学校へ名称が変更になる。この事が正式に耳に入ったとき、大きな驚きとともに一抹の寂しさを感じずにはいられませんでした。これまで、幾度か校名が改正されるといううわさは聞いていましたが、まさか現実になるとは正直思いませんでした。

訓大に入学する前は、『職業訓練』という言葉に一種の抵抗を感じていました。在学中、田舎の友人に大学名を教えると、よく「へー、訓練校に通っているんだ!」とよく言われたものです。そのことが、ものすごくいやだったことを記憶しています。それは、当時の訓大が、あまり知名度が高くなかったからだと解釈しています。よく、外から客観的に物事を見ることにより本質がわかるといいますが、訓大を卒業し、離れてみて本当にいい大学だったなと、あらためて再認識しています。授業料は安いし、設備は最高に整えられているし、おまけにとてもきれいなキャンパスで、過ごせたことを誇りにさえ思っています。

福山職業訓練大学校 情報システム

池 田 秀 作

最近、いろいろな人に接する機会があるわけですが、訓大のことを知っている人が、学生時代に比べて多いことに少し驚きを感じると同時に、そのことを、とてもうれしく思います。滄水会名簿を見てもわかるように、大勢の方があらゆる方面に活躍されています。知名度が上がってきたのも、訓大出身の先輩方が、いろいろな分野で活躍され、ご尽力されたおかげだと思いますし、自分自身も身を引き締めて頑張っていかなければいけないと、強く思う次第です。

これから、職業訓練大学校という名称が無くなることはとても残念で悲しいことですが、これも時代の流れなのですから仕方ないことです。しかし、訓大が30数年つちかかってきた伝統は、校名が変わろうとも生き続けていくでしょうし、無くなることもないでしょう。

職業能力開発大学校が訓大のよい伝統を引き継ぎ、より一層発展していくことを心から祈念し、OBの一人として精進していきたいと考えています。